

放牧管理を見直そう

春耕期となりました。放牧にはもう出しましたか。

釧路管内の平年萌芽期は、4月25日となっており、5月上旬には放牧草地の状態を見て、牛を放しましょう。

1、放牧草から収益を上げる

集約放牧の考え方は、1頭当たりの乳量ではなく、草地1畝当たりの収益を上げることです。つまり、放牧草の摂取量(DMI)をどれだけ効率的に採食できるかということです。それは放牧草の高さ(草高)と密度、草種、草種の成熟度によって左右されます。

放牧時間は土地の肥沃性、日照、水分などの条件がよく、草地が牛の採食に適した高さ(草高)と密度を維持し、茎葉の量とその比率が適切であった場合、牛は十分なDMIが得ることができま

2、放牧の馴致(ならし)が大切

放牧を開始する場合、牛を外気温に馴らしたり、第一胃内ルーメン微生物を放牧草に対応させることが大切です。早めの放牧は、放牧馴致を兼ねることになります(図

1)。

放牧馴致期間は、放牧未経験牛で2週間〜1カ月程度、放牧を経験している牛で9〜10日間の馴致(ならし)が必要です。

馴致(ならし)が必要

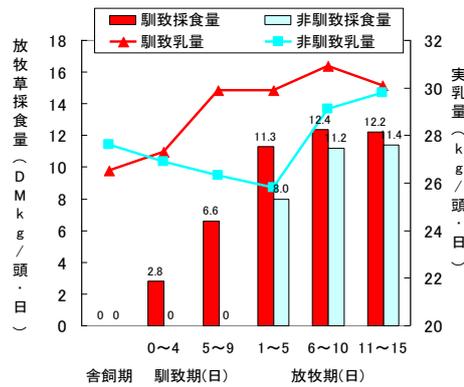


図1 馴致放牧の効果(畜産試験場 1989)

3、集約放牧のポイント

放牧草地をより有効に活用するためには、牧草の生長に合わせた放牧面積にします。また、採食量を得るために密度の高い草地であることが望まれます。ポイントは、①栄養価の高い放牧向けの草種を利用する、②短草利用で高栄養の牧草を摂取させる、③乳成分を安定させるため併給飼料を利用する、④放牧関連施設を整備する、などを行って腹いっぱい食べさせるような管理をしまし

う。



写真1 栄養価の高い放牧草種に

4、食べない草には理由がある

牛を放牧地に出しても、食べずに戻ってきたことはありませんか。その場合、①草が伸びすぎている、②肥料や堆肥の撒きすぎが考えられます。

窒素が多いとミネラルバランスが崩れて植物体が美味しくなくなるので、肥料の撒いていない牧草の下あたりをよく舐めるように食べている姿が見られますが、そういった理由によるものです。

要は、既存の肥料散布を見直し、微量要素を投入することが必要です。放牧地には、早春時の肥料散布は行わず、炭カルやヨウリンなどを散布して、嗜好性を高めた草づくりを行いましょう。

5、放牧関連施設への投資を

放牧する頭数規模に応じて、牧柵、牛道、パドック、ゲート、飲水施設などを整備することが重要です。特に、牛道やパドック、牛舎出入り口等がぬからないようにすること、飲水施設も採食量を確保するために必要です。また、ソーラーパネルを用いた電気柵にすると簡単に牧区を仕切ることが可能です。

写真2は、パドックに土壌硬化剤を混合して地盤を固めたものです。実践された農家は、「多少掘れるが、ぬかるみがなくなり牛が汚れることがなくなった」との意見がありました。



写真2 土壌硬化剤により整備されたパドック

このように取り組むことで、牛の出し入れ作業の軽減となります。ぜひ放牧関連施設の改善に取り組んでみてはいかがでしょうか。